

# こころ



平成 20 年(2008)・10 月

編集発行 富山県教育委員会

## ありがとう お母さん

いつもいつしよにいてくれて

ありがとう

治りようでつらい時

心配したりはげましたり

お兄ちゃんの授業参観にも行かずに

ぼくのそばにいると言ったり・・・

でもお兄ちゃんのところへも

行つてあげてほしいな

ぼくはだいじょうぶだから

退院したらお手伝いするよ

洗たく物をたたんだり

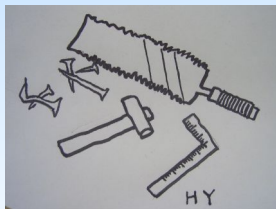
食器を片付けたり

大人になったら大工さんになって

家を建ててあげるよ

本当にありがとう

お母さん



(富山県立小学校)

児童作品)

## 巻頭言

## 教師の思い

富山県特別支援教育研究会副会長  
高岡市立芳野中学校校長  
氷見哲正

中学校を中心に勤務してきた自分が、障害のある子どもたちの教育に直接携わることになるとは、あまり考えていなかった。

今から5年以上前にさかのぼるが、聴覚障害者の教育を専門に行う高岡ろう学校勤務を命ぜられた。見ること、聞くことのほとんどすべてが初めてのことばかりで、当初は不安な気持ちもあったが、幸いにも豊かな経験と優れた専門性を有する教職員に支えられ、何とかやれそうかなと思えるようになるまでにそれほど時間はかからなかった。

ろう学校での勤務は2年間だったが、自分の教員人生にとって学ぶことの多い、貴重な体験をさせていただいたと思っている。中でも、教師たちが特別支援教育に傾ける情熱、さらには専門的な知識や教育技術については感心させられることが多く、自分の不勉強と認識の甘さに恥じいることもあった。

今再び中学校に戻ってみて思うのは、小学校や中学校で教える場合も、教師が大切にすべきことは同じではないかということである。それは障害の有無にかかわらず、一人一人の子どもの可能性を伸ばそうとする「思い」である。

もっと具体的に言うならば、学習の内容や

方法、そして教師に求められる専門的な知識や技術が校種によって異なっている、子どもたちがそれぞれの能力と適性に応じてたくましく生きていく力を身に付けるために、適切に支援しようとする熱いハートである。

その意味で私が注目しているのは、新たにスタートした特別支援教育において、障害のある子ども一人一人の教育的ニーズに対応して作成すべき「個別の指導計画」及び長期的な「個別の教育支援計画」である。このうち生活や学習上の困難を改善又は克服するために作成される「個別の指導計画」の基本理念は、小・中学校の通常の学級に在籍する発達障害等のある子どもはもとより、特段の障害のない子どもについても、一人一人に応じた適切な支援の在り方を担任が工夫するために効果的であると考えている。

残念ながら、特別支援教育に対する小・中学校教員の関心や理解は、特別支援学級の担任やコーディネーター等を除けば、まだまだ不十分であるといわざるを得ない。新しい特別支援教育の流れの中で、今後、小・中学校において、様々な障害に対する理解を深めたり、その対応について研修を積んだりする気運を盛り上げて行きたいと考えている。

実践例 1

担任・保護者との連携で自己肯定感を高める  
- 通級指導教室担当者としての取組 -

高岡市立成美小学校 早川 恵子

1 はじめに

自分のがんばりが認められ、自己肯定感が高まることは二次障害の予防に有効である。

そこで、児童の在籍学級、家庭での様子を知り、担任や保護者と情報を共有し、一貫した連続性のある支援に取り組んでいる。

2 個別の支援シート(個別の指導計画)の活用

年度当初に担任に記入してもらった個別の支援シートを元に、保護者や担任と話し合っ、適切な支援の在り方を共通理解している。

学習内容が定着しにくく、学習への参加意欲の低下もあり、午後になると眠くなるA児には、個別の支援シートを活用し、それぞれの場面で、取り組めそうなこととして、基礎的な 学力を向上させるための「本読み」や「百マス計算」、「早寝・早起き」の習慣を付けることに取り組んだ。それぞれの場での取組の状況を共有し、A児を励ますようにした。A児は、自分の課題と周囲の評価が一貫していることから、自信をもって学習や生活に取り組むようになった。

今後も、個別の支援シートを活用して次の課題を設定し、校内委員会や関係機関との連携に用いてA児が自信をもって学習や生活していくことを支援していきたい。

3 チャレンジ日記の活用

引っ込み思案で、持っている力を十分に発揮できないでいるB児は、学級の中では認められる場面が少ないのではないかと思われた。そこで、通級による指導の時間でのよさやがんばりが広く認められるようにチャレンジ日記を活用してみることにした。

チャレンジ日記とは、本人のがんばったことを記録し、担任や保護者に伝えるツールである。学習の最初に目当てや学習内容、最後に自分の感想を書き、目当てが達成できたら「グッド」、達成できないときは「ファイト」のはんこを押すことにしている。

「百マス計算を速くできる」という目当てを決めたB児は、「新記録がでた」と言って、喜んで教室に戻った。自分のがんばりが担任や保護者に認められることを期待しているのである。少しずつではあるが、B児が、自信をもって学習に取り組む姿が担任や保護者から聞かれている。

4 本人の頑張りへのサポート

興味のあることには時間を忘れて取り組むが、集中力にムラのあるC児は、小児科の発達相談で、「本人ができそうな課題を家庭と学校の両方で続け、できたことを褒める」「テレビ・ゲームは1時間以内にして早寝・早起きをする」というアドバイスを受けた。このことを関係者が共通理解し、支援と見守りをするようにした。C児は約束したことは真面目に守ることができ、母や担任に褒められ、家でも学校でも言動が安定するようになった。この自信が「在籍学級で学習したい」という気持ちを生み、集団での学習に進んで参加するようになってきているという。

5 終わりに

本人と周囲の関係者が目当てを確認して、一貫した支援をし、本人の自覚を促していくことは、自己肯定感を高めることにとっても効果的であった。

今後も、本人の情報をリアルタイムで共有し、支援方法について共通理解を図り、一人一人の成長を支援していきたい。

生徒指導	特別支援	その他	該当項目を○で囲む(複数可)		
観点	学習面		行動面・対人関係面	健康面・運動面	
項目	(知能能力、全般的スキル(学習参加の係り) (教科等の学習の状況等))		(友達関係)(仲間関係)(あそびや運動参加) (コミュニケーション)	(日常生活動作)(身体運動) (健康状況等)	
本人の良き	理科の学習(特に実験)に意欲的に取り組む。		休み時間に遊ぶ友達がいる。 好きな友達とゲームの話で盛り上がる。	「はくのからだ」の本が好きで、よく見ている。	
の気になる	学習困難、集団行動困難、不注意(多動)(衝動性)乱暴、友人関係のトラブル、忘れ物頻繁(多動な傾向)、チック、場面緘黙、その他		忘れ物頻繁、知的障害、構音障害、吃音	この項目を○で囲む(複数可)	
と	漢字をなかなか覚えられない。		ささいなことにカッとなる。 勝つことにこだわり、負けそうになると活動を投げ出してしまふ。	偏食、左きき、身体意識が低い	
め	経験したことを作文に書くことが苦手である。				
重点目標(短期目標)	2年生までの漢字を10個覚え使えるようになる。		ルールを守ってゲームをする活動を重ねる。	給食の量を減らして、残さず食べたことを実感できるようにする。自分の身体や健康管理について興味をもつ。	
通級指導の目標	簡単な言葉のやりとりができるようになる。		自分の奇立った思いを言語化できる。		
具体的な支援及び手立て	漢字パズルや4字熟語ゲームなどで、漢字への興味を広げる。		負けたら「残念」と言って拍手をする、というルールを決めて、守れたらポイントをゲットできるようにする。	カードに今日食べたものを書き出し、書いた数のカードだけ頑張リシールをはる。	
通級指導での支援	ひらがな漢字を見て「吹き出し」の古詞を簡単な漢字を入れて書くことができる。		リニアパズルや絵対カードを見て、人物の気持ちを言ったり、書いたリして、自分以外の人の気持ちに気づかせる。	食べ物の味義の話を聞いたり、食べ物を栄養とに分類したりして、食べ物の興味をもたせる。	
全校支援体制(協力してほしいこと)	少人数指導の先生にT・Iで指導してもらうときに、個別に支援する機会を多くする。 学年で学習するときに、できているところを認めていくようにする。				
保護者関係機関との連携	学習連絡票を家庭と学校でやりとりし、学校で頑張っていることを伝えたり、家庭での目当てを確認したりする。 必要に応じてケース会議を開き、個別指導の時間を追加することについて検討する。				

### 1 はじめに

二次障害を防ぐためには、症状の早期発見と適切な支援が必要である。しかし、中学校は教科担任制のため、一日を通した継続的な生徒の観察が難しい。また、本校は、本年度より特別支援学級が閉級となり、全教職員が協力し、通常の学級で特別な支援を必要とする生徒に対応している。そこで、情報の共有と生徒への一貫した指導・支援と専門機関との連携による助言や指導の活用を図り、通常の学級での支援体制の確立に努めている。

### 2 早期発見の手だて

#### (1) 日常の観察と情報収集

中学校では、一人の生徒に学級担任だけでなく、教科担任や学年担当者、部活動顧問など複数の教員がかかわることが可能である。そこで、本校では、各学年担当の特別支援コーディネーターを配置し、気になる生徒についての情報を素早く校内特別支援委員会に集約して対策を立て、全校体制を整え、支援するように努めている。また、校内特別支援委員会だけでなく、生徒指導委員会やいじめ・不登校対策委員会等も情報交換の場として活用し、特別支援コーディネーターが参加して、多面的に情報を収集し、支援策を協議できるようにしている。

#### (2) 教育相談

毎学期に教育相談を実施するとともに、年2回Q-U調査を行っている。発達障害のある生徒の中には、自己表現や人とのコミュニケーションをとることが苦手な生徒もいる。教育相談や事前調査、

Q-U調査の結果及び結果の変容を早期発見の手がかりや支援の評価の手だてとし支援の見直しに生かしている。

### 3 校内の支援体制

#### (1) 個別の指導計画を活用した一貫した指導

各教科担当者が同じ長期目標・短期目標の達成に向け、各教科ごとに支援の手だてを記入するなどして個別の指導計画を作成し活用している。また、専門機関の指導員を交えたケース会議を学年ごとに開き、これまでの支援の在り方を見直して、今後の支援方針について検討している。

#### (2) 校内の連携(校内外の人的資源の活用)

本校には、校内適応指導教室指導員(発達障害が見られる生徒にも学習や生活の場面で支援)と、スクールサポーター(特別支援教育支援員)中1学級支援講師が配置されている。これらの支援員等と連携して、生徒の気持ちが落ち着かない時には保健室や相談室で支援したり、授業に加わり学習支援を行ったりしている。

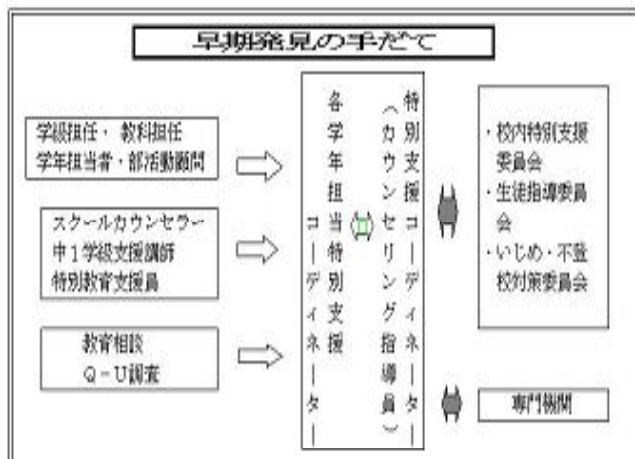
また、昨年度よりスクールカウンセラーが1週間に半日配置されている。スクールカウンセラーは日々の具体的な支援についての助言だけでなく、問題行動や不登校、進路についての悩みを抱えている生徒や不安を抱いている保護者のカウンセリングも行っている。

### 4 外部専門機関との連携

学校だけで限られた時間の中で適切な対応策を見出すことは難しい。校内での支援の限界、新たな課題が現れたときは、東部教育事務所や発達障害者支援センター、富山市教育センター、県総合教育センター、児童相談所等、状況に応じ必要な専門機関と連携し、保護者の理解を得るための助言や学校や家庭における支援のポイントについて助言を受けることで、早期の対応ができるようになっている。

### 5 終わりに

二次障害への対応の基本は周囲の理解である。保護者や学級担任だけが抱えるのではなく、全教職員、専門機関、地域が互いに支え合う支援体制を構築していくことが大切である。



### 平成20年度発達障害教育指導者研究協議会

8月7、8日の両日、横浜市で独立行政法人国立特別支援教育総合研究所主催の「平成20年度発達障害教育指導者研究協議会が開催されました。この研究協議会は、発達障害にかかわる教員の指導力向上のため、本年度から新たに始まりました。全国から、公私国立の幼、小、中、高、特別支援学校教員や教育センター、教育委員会事務局職員など212名が参加しました。本県からは小、高、特別支援学校、教育センター、教育委員会事務局から5名を派遣し、研修の成果を持ち帰っています。以下、各参加者が研修した内容の一部を紹介します。

#### (1) 基調講演 - 発達障害における二次的な諸問題 - (北海道大学大学院教育学研究院附属子ども発達臨床センター 教授 田中康夫氏)

「二次的な障害は、人として生きる上での問題であり、すべては関係性の歪みの上に成り立っていることである」という視点から、発達段階ごとの以下の4つのつまずきを挙げて説明があった。

##### < 乳幼児期にみられるつまずき > - 初期の関係性のつまずき -

##### **乳幼児期には、保護者に対して適切な子育てへの支援がポイント**

乳幼児は、養育者との関係の中から関係性を学んでいく。その過程で相手を認識し、自分を大切にしてくれる人を認識していく。虐待・ネグレクトがあると子どもがこの過程を経ないまま育つことになる。発達障害のある子どもはその行動特徴(特別な対応が必要、育てにくさ、愛着の感じにくさ、多動、金切り声等)から、結果として、適切な愛着行動を育てられないまま大きくなっていくことになる。また、障害がない場合でも、虐待・ネグレクト等により発達障害に似た症状を示すこともあることに留意する必要がある。

##### < 幼児期～中学生にみられるつまずき > - 社会生活に適應することのつまずき -

##### **シグナルの意味をくみ取り、成長の糧にする支援がポイント**

子どもの生活が家庭から外(身近な社会)へ移行していくこの時期には、様々な情緒的障害が現れることがある。乳幼児期であれば夜泣き、頻尿・夜尿、吃音等が、中学生になると頭痛、摂食障害、不登校などがある。これらの症状は、受け止める人(状況)があるから発現するため、成長(適應)のために必要なことととらえることが支援のスタートである。

##### < 小学生～中・高校生にみられるつまずき > - 参加へのつまずき -

##### **チームで戦略を検討し、多面的な支援の実施がポイント(一人ではない)**

子どもの主たる生活場面が、学校等の社会生活に移行していくと、その生活で精神的困難があることを周囲に示す、同時に適應(自己防衛)しようとして、身体的、精神的症状を示すことがある。主なものに、引きこもりや不登校がある。これらへの介入の方法に決まりはない。

##### < 小学生・高学年～高校生にみられるつまずき > - 思春期心性とのつながり -

##### **障害への基本症状へ丁寧な対応が生活を変容させるポイント**

子どもの成長に伴い、発達障害が反社会性や引きこもりの重篤化に影響することがある。その後、行為障害や犯罪につながる事例も報告(報道)されているが、それらはすべての子どもが歩む道ではないことに留意し、時間をかけ、その認知特性に配慮した対応が必要である。

これらのつまずきの基本的な対応として、「本来乗り越えられるもの」という幻像を捨て、「今できないこと、乗り越えにくい事実を受け止める」「当事者を追い詰めない」「元々時間が必要なことで、時間がかかること」と受け止め、本人に正しく向き合い「ほめ方を配慮し、いけないことは示す、本当はいい子なんだというメッセージを送る」根気が必要である。最後には、一人一人に

応じた学ぶ喜びや自分観が育つような本来の学校教育の復権に期待する激励があった。

## (2) 各分科会から

### 早期支援について(乳幼児期)

保護者に支援の方策等を伝えるときは、コーディネーター等の第三者がかかわり、担任は、日頃の連絡を活用し、支援の効果を伝えるなどの役割分担をするとよかった。

出かける相談よりも、巡回相談などの方が手軽でかつ、園全体にとっても効果がある。

子育ての視点で継続的に支援してもらえる機関や人を紹介・仲介する。

### 二次障害への対応(小学生～高校生)

学級開き時、総合的な学習の時間、道徳、特別活動などを利用し「ボランティア、思いやり」などを取り上げ、個性を認めあえる学級運営を学級全員で共通理解する。

休憩時間に相談室を開放したら、気の合う仲間(発達障害等)が集まってきた。

科学部、美術部、情報部など集まりやすい部活動は、人数が少なくなっても存続したり、新設したりする。

発達障害について、周囲の子どもに説明するときは、音や光の感じ方が違うことなど、子どもたちが本来もつ知的好奇心に働きかけると効果的であった。

学校全体で「死ぬ、うざい、消える」などで片付けられないような言語環境を整える取組を行う。

### 中 - 高の連携(高等学校)

まだまだ、校内体制の認知がされていない。保護者に隠しておきたい心理が働いていることなどから校内支援体制が機能しにくいので、入学説明会や学校からの案内、校内での掲示などで、いつでも相談できること、校内の相談の窓口、可能な支援について周知することが必要である。(保護者や本人向け)

入学後、できるだけ早く適切に対応したいので、入試の説明時、入学後の連絡会を活用して、生徒への適切な支援の必要性とその内容について情報を収集するようにしている。

## 情報コーナー ; 「発達障害教育情報センター」のWebサイト開設

8月27日、「発達障害教育情報センター Web サイト」が開設されました。このセンターは、発達障害のある子どもの教育の推進・充実に向け、発達障害にかかわる教員及び保護者をはじめとする関係者への支援を図り、さらに広く国民の理解を得るために、Web サイト等による情報提供や理解啓発、調査研究活動を行うために設置されたものです。そのコンテンツについて紹介します。

### < 校内研修、個人の研修に >

#### 研修に役立つ教員向け講義の配信

「ちょっと気になるが出発点」「教室の中の気になる子どもたち」「注意を集中し続けることが難しい子」の3つの講義がそれぞれが13分～15分とコンパクトにまとめられていますので、校内研修に個人での研修に手軽に活用できます。また、講義資料をダウンロードすることもできます。

### < 子どもの支援に生かすために >

子どもの困難な点別に市販の教材教具やちょっとした教材教具の工夫が紹介されています。直接活用できないものの中にも一部を活用できるアイデアも見つけることができますので、自作の教材作成や子どもの困難な点に応じた教材教具の提示に活用下さい。

ホームページアドレス ; [www.nise.go.jp](http://www.nise.go.jp)

( 国立特別支援総合研究所のHP から入れます )

ご紹介した内容についてさらに知りたいことがありましたら、いつでもお気軽にご相談下さい。障害のある子どもへの支援内容・方法について、「最寄りの特別支援学校」「東部・西部教育事務所」「富山県総合教育センター教育相談部特別支援教育担当」で相談・助言を受けることができます。

# こころギャラリー



「カラフルライオン」  
氷見市立小学校 6年生作品



「棚」  
砺波市立中学校 2年生作品



「レインボーピラミッド(シェードランプ)」  
射水市立小学校 6年生作品



「キラキラ光のおくりもの」  
富山市立小学校 2・4年生合同作品



「はなびみたいな花」  
黒部市立小学校 2年生作品



「選挙ポスター」  
上市町立中学校 1年生作品

## < 編集後記 >

子どもたちの作品を見ていると、一人一人の優しく素直な心が伝わってきます。子どもたちがもっている豊かな感性や表現力を引き出すためにも、一人一人に合わせた支援をしていきたいと思ひます。